

事例紹介 都市公園整備の状況

甦る自然とのふれあい・向江公園

鹿児島県末吉町

はじめに

末吉町における都市公園の整備は昭和26年都市計画法の適用を受け、2年後の28年度から着手して現在都市人口8,390人に対し9.86haを併用し、1人当たりの公園面積は11.8m²となっている。

本町の行政人口は、21,600人で鈍い動きではあるが、やや上向いた人口動態が進んでいる。昭和60年における65歳以上の高齢人口の示す割合は6.5人に1人、鹿児島県平均の7人に1人より高く、全国平均をかなり上回り、西暦2000年では、全国平均6.4人に1人に対し、5人に1人と推計され高齢化が先行している。

一方自由時間と強い関連をもつ労働時間は現在の7割程度になろうとされている。

このような本格的な高齢化社会の到来と、自由時間の増大や、価値観に対する変化や、物質的な豊かさよりも精神的な豊かさが重視されつつあるなかでは、ゆとりと潤いといった質の高い諸活動の「場の整備」が必要となつた。

これらの対応策の一つとして小規模ではあるが、向江公園が完成した。

1. 向江公園の経緯

この向江公園は、明治の初頭、農業用水溜池として構築されたものであるが、近傍の住民や学童たちが釣りや水遊び等に興じ、戦前戦後を通して、それぞれの時代における思い

出も様々なものがあり、町民にとってはまさに馴染み深い池である。

都市計画事業としての取り組みは、昭和28年に池の一部（面積0.36ha）を含めた児童公園整備事業実施認可を受け、昭和30年4月1日開設した。当時はボートが浮かび釣りが盛んに行われ、鯉、フナ、ナマズやウナギ等も多く棲み、泳ぎも盛んであった。

しかし都市化が進むにつれ家庭雑廃水や降雨時における濁流の流入などにより、ヘドロが堆積し始め、昭和38年頃から釣り等も下火となり、最近では悪臭が漂い荒廃の一途をたどりつつあった。また同時に、牛ガエルが異常に繁殖し、昼間でも異様な雰囲気のする荒廃ぶりとなっていた。

昭和45年、町ではこの池をレクリエーションの場として総合振興計画に取り上げ、昭和52年の第2次の振興計画では、その実施の方策等を検討し、都市計画事業として方針を定め、昭和54年11月、庁舎建設位置決定とも併せて、近隣公園として計画の素案を作成、55年度町単独事業により吐口の尺八工を汚水分离可能な構造に改築し、昭和57年度から補助事業として着手、7年の歳月と268,086千円をかけて昭和63年度で完成した。

2. 本工事における特長的なもの

本公園は、近隣公園として内容的には日本庭園を基調としながら町民に親しまれ挙って憩える公園とした。

池には、ヘドロが1.5~2.0m堆積している関係もあってどの様に安定させるかが問題であった。多面にわたって検討を加えたが一番経済的な工法として、凝固剤を使用して安定させることとした。また景石や石組は道路工事で出土したものを利用し、盛土についても道路工事の廃土を利用するなど経費の節減に務め、樹木等も町民の篤志家による寄贈樹木等での充実を図り、回遊式の園路の一部橋梁についてもコルゲートパイプを利用してメガネ橋とするなど工夫を加え、庁舎の見える方向からは、庁舎とマッチする様、同色系のタイル張や法枠工でまとめてある。

3. 本公園に託すもの

①本町ではいま「絵の町末吉」の運動を進めている。子供達のスケッチ大会や、釣り大会を通じて思い出深い「故郷の公園」としてもらいたい。また、本格的な高齢化に向けて見ながら憩い、楽しみながらジョギングや散歩を通じて健康を維持してもらうこと。

②屋外ステージを利用することにより地域の連帯感を深めコミュニティの場として老若男女が集い、レクリエーションを通して健全な慰楽の場として、コミュニケーションを生み出すこと。

③滝や四季折々の花にふれ、樹木の間より池を見てもらい詩情や、絵画等創造的文化活動にも利用してもらうこと。

④水辺が、水性動植物の生態研究の観察園として小中学生の教材として使えること。

⑤災害時における避難場所として提供できること。

⑥折々の花見やホタル狩等、地域にあった集落ごとの小規模なイベントを数多く造ってもらうこと。

町では、以上のことを願ってホタル（源氏ホタル）については、7年前から幼虫をふ化させ、年間3千匹前後放流しているが、その実効が現れ、これからはこの池だけにとどまらず水系の河川にも放流する計画である。

また、これに陸棲のホタル類を加え、観賞期間を伸ばすと共にハッショウトンボをはじめ現在9種類生息しているトンボ類の増殖にも努め、子供達が楽しみながら観察できる公園にしたい。

4. 都市緑化に対する町民との関わり

本町は庁舎建設を期して緑化プロジェクトチームをつくり、町民から寄贈される樹木を公共施設の修景、景観について充分吟味して植樹しているが、中には老木そのものや、一般にはなかなか手に入らないものまで出てくる実情で、整枝を行うとまれにない修景、観賞木の上物が出来上がるなど、町民も特に樹木の大切さを見直すことにもなる。このことは、観賞用樹木や花木について興味を抱かせる大きな役割をもっている。

水生植物については、規模的に種類に限度があるが、花期となるべく長くもたせることも考慮して、種類の選定を行い、四季折々に町民にめでてもらう計画である。

5. 施設の概要

総面積は約2.3ha。中心に3,200m²の池を配し、その周囲に幅3.0m~1.5mの園路を設け、回遊式の公園としている。池の護岸は、自然石及び、乱杭を用い日本庭園風の仕上げとし、洲浜240m²、沢飛び2箇所、中之島、ミカゲ石橋、めがね橋等を設け、景観に変化を持たせている。

池の水は湧水によってまかなっているが、これをポンプ循環させることにより、延長約

60mの流れと滝（H = 4 m）に水を落とし子供にも水に親しめる場としている。

また池の南方には花菖蒲園560m²を設け八ツ橋によって、菖蒲園の中を歩けるようにしており、現在45種、約2,400株の花菖蒲が植栽されている。

主な広場としては芝生広場610m²、アスレチック広場520m²、屋外ステージを含む自由広場1,240m²、児童広場700m²があり、グランドカバーを芝生とすることにより自由で快適な空間を作ると共に、遊具等を設置し、子供等の活動的な場ともしている。

その他の施設としては、四阿2棟、パーゴラ1基、便所2箇所、水飲み場3箇所、野外卓3基、ベンチ9基等を設け、休養、便益の用に供すると共に、照明燈5基により夜間にお

ける利用も可能となっている。

植栽は、既存の樹木をできるだけ残すと共に高木200本、中木40本、低木3,400株を植栽し、四季折々楽しめるよう工夫している。

又、池の浅深部には、スイレン、ハス、コウホネ、オモダカ、等の水生植物260株を植え、花を楽しむと共に魚やトンボ等の産卵の場にもなっている。

おわりに

都市化の進展に伴い自然が壊され忘れられようとしている思い出深い「池」の復元は、町民にとって思い出はなくとも、新たな景観と環境にふれあうことにより、新たな思い出やイベントが見出せるものと期待している。

(末吉町都市計画課)

凡　例		
記号	名　称	摘要
A	芝生広場	
B	アスレチック広場 B-1 もっこ砦 B-2 丸太山越 B-3 三連平均台とブレイスステップ	
C	自由広場	
D	池 D-1 滝 D-2 泉　飛　浜 D-3 川　州 D-4 橋 D-5 灯　籠　門 D-6 水　門 D-7 ポンプ室	(既設)

E	E-1	しょうぶ園 八ツ橋	
F		パーゴラ	
G		四　阿	58×58
H		〃	4.0×4.0
I		野外卓	
J		ベンチ	
K		野外ステージ	
L		慰靈塔	(既設)
M		水神宮	(移転)
N		便　所	
O		飲用、水栓	
P		園名石	

Q	車　止	
R	砂　場	(既設)
S	1回旋スベリ台	〃
T	スイングボール	〃
U	四連ブランコ	〃
V	リングブランコ	〃
W	ナトリウム燈	

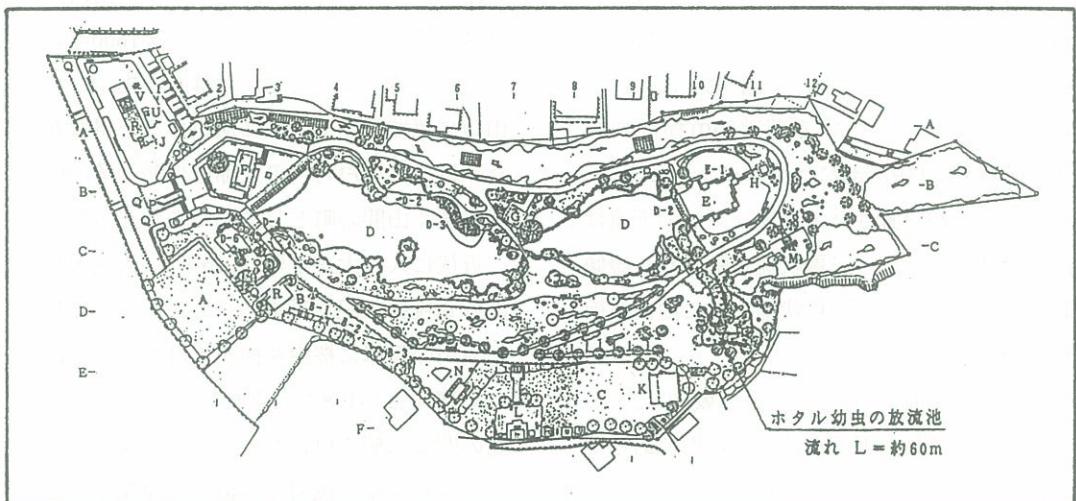


図-1　末吉都市公園3.3.1向江公園